The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アラビア語を母語とする日本語学習者における自動詞・他動詞の習得について ： 自他の混同と助詞の選択
Author(s)	エルハディディ, アブデルラフマーン
Citation	日本語・日本文化研究. 2020, 30, p. 93-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アラビア語を母語とする日本語学習者における自動詞・他動詞の習得[i]について

―自他の混同と助詞の選択―

エルハディディ　アブデルラフマーン

1. はじめに

筆者は日本語学習者の 1 人として、自動詞・他動詞を学習する過程で、さまざまな困難を感じた。例えば、以下の文はアラビア語を母語とする日本語学習者[ii]を含めて、日本語学習者から聞くこともあるし、学習者が作成した文として目にすることもよくある。

(1) 古くなったみかんを食べておなかが壊した。(非文)

(2) 財布が落としてしまいました。今日はお金がありません。(非文)

以上のような文は初級レベルに限らず、中級上級レベルの学習者にも見られ、筆者も自動詞・他動詞（以下、自他とする）を習得する過程で以上のような誤用をしていた覚えがある。本稿では学習者の自他の使用における「を自動詞」及び「が他動詞」について考察する。

2. 先行研究

自他を学習する際の困難な点や、学習者の選択や誤用については、石川（1991）、守屋（1994）、小林（1996）、森田（2004）、市川（2014）、杉村（2013a, b, 2016a, b）エルハディディ（2018）、中石（2020）など様々な研究が行われてきた。以下に自他の選択を対象とした研究として守屋（1994）と杉村（2013a, b 他）を紹介する。

2.1 守屋（1994）

守屋（1994）はアンケート調査の結果に基づき、日本語の自動詞・他動詞の用法上、使い分けの条件を分析することを研究の目的とした。中級前半から中頃の学習者（中国語母語話者 60 名、韓国語母語話者 49 名、英語母語話者 21 名）を対象に助詞と自動詞、他動詞の選択アンケートを行い、その結果から自他の選択条件を 5 つに分けた。

条件 1.　イベント（事態、出来事）が非人為的に成立した揚合（例：髪が長くなった）

条件 2.　イベントが人為的に成立した場合でも、行為の主体が特定できない場合（例：人が集まる）

条件 3.　イベントが人為的に成立し、かつ行為の主体が特定できても、行為の実現、あるいは意図性の存在よりも結果に話者の視点がおかれる場合（例：肉が焼ける）

条件 4.　イベントが人為的に成立し、かつ行為の主体が特定でき、さらに成立自体に視点がおかれていても、話者が主体の意図性に視点をおかず、事態の成立そのもの、およびその結果

に注目し、主体ぬきで事態を表現する場合（例：テーマが決まる）

以上の 4 つの条件で自動詞が使用されるとし、他動詞選択の条件は上記の自動詞選択条件と裏表の関係にあり、さらに以下を加えている。

条件 5.　イベントが非意図的に成立した場合でも、主体のテリトリー、責任の範囲でおきた揚合は、他動詞を用いることがある（例：財布を落とす）

守屋（1994）では学習者の母語に関係なく同じ誤用が見られるものもあれば、母語により学習者の誤用が異なる場合もあることが分かった。また自他の選択の難しさは程度の差はあれ、自動詞選択の難しさにあるとして、条件 1 から 4 にかけて習得が難しくなると指摘している。

守屋（1994）の研究では学習者が「自動詞・他動詞」を選択するだけではなく、格助詞「が・を」も選択する形式になっている。それを参考に本研究においても、守屋と同様に学習者に助詞の選択を求めることにした。しかし、学習者が「を＋他動詞」あるいは「が＋自動詞」を選んだとしても、それらが全て無条件で正解になるわけではない。格助詞の習得不足と自動詞、他動詞の形式的な混同が重なれば、学習者が自動詞のつもりで「を+他動詞」を選んでしまうことがあり得る。また守屋（1994）の研究では学習者の回答における「を+自動詞」あるいは「が+他動詞」を結果として述べているだけで詳しい考察は行ってない。学習者が選びたいものを選べているかを確認するために、コメントであれ、インタビューであれ、何らかの方法で学習者が何を考えて選んでいるかを示すものが必要になるのではないだろうか。

2.2　杉村（2013a, b 他）

杉村（2013a）は、日本語はナル的言語であるため人為的事態でも自動詞が使われることがあると説明しただけでは、結局どのように使い分ければいいのか分からず、教育上あまり助けにならないと考えた。教育上効果のある提言をするためには、一般的な類型を述べるだけでなく、具体的に①日本語母語話者はいかなる基準で自動詞、他動詞、受け身を選択するのか、②日本語学習者はいかなる基準で選択するのか、③日本語学習者の母語の影響が出やすいところと出にくいところはどこなのかを診断し、有効な処方箋を書く必要があると述べている。

杉村（2013a, b 他）は守屋（1994）と同じく格助詞を選択する形式になっている。杉村は選択肢にさらに受身を加えて、60 問の日本語の自動詞・他動詞・受身の選択テストを作成し、日本語母語話者と学習者（中国語母語話者、英語母語話者、クメール語母語話者、韓国語母語話者、マレー語母語話者）の選択傾向について様々な研究結果を明らかにしている。

杉村は学習者の回答における「を自動詞」あるいは「が他動詞」をねじれ[iii]とし、結果として述べてはいるが、対象外にした。しかし、杉村の研究の結果を見ると、学習者の回答にはねじれの選択率が高いものがいくつかある。例えば、杉村（2016a）でクメール語を母語

とする日本語学習者の「問題（が、を）（解けたら、解いたら、解かれたら）手を上げてください。」におけるねじれの選択率はN3レベルで71.4%と7割を超えている。つまり、以下の（1）（2）という解答をした学習者が71.4%であり、自動詞（7.1%）・他動詞（21.4%）・受身（0.0%）を選択した学習者よりも非常に割合が高い。

（1）問題を解けたら、手を上げてください。（非文）

（2）問題が解いたら、手を上げてください。（非文）

（1）あるいは（2）という選択をした学習者が、自動詞と他動詞と受身のいずれを選択したつもりだったのかは、杉村の方法だけで調べることはできない。

また杉村（2016a）の結果でも、クメール語を母語とする日本語学習者の「さあ、肉（が、を）（焼いた、焼けた、焼かれた）から、食べましょう。」の問題におけるねじれの選択率はN3レベルの学習者で64.3%と6割を超えている。また杉村（2016b）でも、英語母語話者の日本語学習者のねじれの選択率が非常に高い。例えば問題17「目が悪くなったので、眼鏡（が、を）（変わった、変えた、変えられた）。」において、自動詞の選択率は2.9%で、他動詞は35.7%、ねじれは50%と半分を占めている。

杉村（2016a, b）は「ねじれ」の回答を除外して、「が＋自動詞」「を＋他動詞」「が／を＋受身」の合計が100%になるように計算し直して、自動詞・他動詞・受身の選択傾向を比較している。しかし、選択傾向だけを見るのであれば、学習者が他動詞のつもりで選んでいるなら、以上のねじれは除外せず他動詞の選択と認めるべきなのではないだろうか。ねじれにおける学習者の意図が「自動詞」「他動詞」「受身」の3つのどれかに偏っていた場合、結果が大きく変わるのではないかと考えられる。例えば、上述した杉村（2016b）における問題17の学習者のねじれの選択率50%であるが、ねじれが見られた学習者がそのねじれを自動詞のつもりで選んでいる場合、自動詞の選択率が2.9%から52.9%になり、他動詞の選択率を超える。このように自動詞、他動詞の選択研究において学習者の意図は研究結果を正反対にするほど重要な要素であり、その実態を知るために、コメントであれ、インタビューであれ、何らかの方法で学習者が何を考えて選んだかを示すものが必要になると考える。

本研究では学習者の意図（自動詞のつもりで選んだか、他動詞のつもりで選んだか）を知るために、文法テストに加えて、自他についての学習者のコメントやフォローアップインタビューを実施し、それにより、産出過程や学習者の意識を探り、先行研究でよく見られる混同（ねじれ）の実態を考察したい。

3. 日本語とアラビア語における自動詞・他動詞

3.1 日本語における自動詞と他動詞

寺村（1982）は自動詞、他動詞を、「死ぬ」、「歩く」などのような「絶対自動詞」、「殺す」、「作る」などのような「絶対他動詞」、「閉める、閉まる」のような「相対自他動詞」、「閉じ

る」、「開く」のような「両用動詞」の 4 つの種類に分けた。寺村は日本語には対のある自他が非常に多く、両用動詞は非常に少ないと指摘している。

3.2　アラビア語における自動詞と他動詞

アラビア語では自動詞から他動詞が派生、または、他動詞から自動詞が派生するという体系をもち、結果的に日本語のように、形態的に似通っている対を持つ自動詞、他動詞が多い。例えば、【xaradʒa】（出る）という自動詞に A （ハムザ）[iv]をつけることで他動詞の【Axradʒa】（出す）になる。

しかし、日本語において「相対自他動詞」であるものがアラビア語において「絶対他動詞」になったり、あるいは日本語において「絶対自動詞」であるものがアラビア語において「相対自他動詞」になったりすることがある。例えば、「見つかる、見つける」は日本語においては「相対自他動詞」であるが、アラビア語では対応する自動詞がない「絶対他動詞」【wajada】である。そのような違いが学習者の自他の習得の障害になることがエルハディディ（2019）で明らかになっている。

またアラビア語では母音が（A, I, U）の 3 つしかなく、（I）と（E）及び、（U）と（O）の区別がない。そのため、「切れます、切ります」「折れます、折ります」のような自他の使い分けは難しいと推測できる。

4.　調査

本調査は日本語の自他の選択レベルにおける形式的な問題の実態を明らかにすることを目的とし、2019 年 2 月から 3 月にかけて筆者がエジプトに帰国し、現地で調査を行った。

4.1　調査協力者

調査協力者はカイロ大学、アインシャムス大学、ミスル大学のアラビア語を母語とする日本語学習者、あわせて 132 人である。その内訳は 2 年生レベル（中級前半、便宜上初級と呼ぶ）の学習者が 55 人（『みんなの日本語』初級終了）、3 年生レベル（中級）の学習者が 36 人、4 年生レベル（上級）の学習者が 41 人である。

4.2　調査方法

4.2.1　選択テスト

本調査はエルハディディ（2018）に続き、誤用が多く見られた自動詞・他動詞と正答率が高かった自動詞・他動詞あわせて 10 ペアの対のある自動詞・他動詞「落ちるー落とす、決まるー決める、折れるー折る、壊れるー壊す、見つかるー見つける、閉まるー閉める、始まるー始める、集まるー集める、並ぶー並べる、切れるー切る」を対象にそれに関する 3 つの場面を設定して、合わせて 30 問の自他を選択する問題を作成した。本研究は守屋（1994）、杉村の研

究、エルハディディ（2018）を参考に、自他の選択だけではなく、助詞（が、を）の選択も求めることにした。このテストではそれぞれの場面における学習者の自他の選択を調べることを目的とし、学習者が本当に選びたいものを選べているかを確認するために、各問題について自動詞のつもりで選んだか、他動詞のつもりで選んだかについて書くように指示した。また単語の意味や漢字の読み方が分からないために答えられないなどのような、テストの妥当性に影響を及ぼす問題を避けて、測定したいことを的確に測定するために全ての漢字にはふり仮名をふった。またすべてのテストに関して調査中に分からない単語がないか確認した。分からない単語があった場合はその意味を教えた。調査で提出した動詞に関しては調査協力者が理解できないものはなかった。

4.2.2　フォローアップインタビュー

テストを実施した後にフォローアップインタビューを実施した。フォローアップインタビューの対象となったのは 132 名の調査対象者のうち協力可能であった 30 名の学習者である。テストの結果に基づき、それぞれがテストで回答した日本語の表現の使用意図や判断理由についてアラビア語で話してもらい、録音した。

4.3　分析方法

筆者の経験から自動詞、他動詞の習得過程において学習者が自動詞のつもりで他動詞を選んでしまう、あるいはその逆の他動詞のつもりで自動詞を選んでしまうのはよくあることである。また、自動詞と一緒に「を」を使ってしまうことや、他動詞と一緒に「が」を選んでしまうこともある。筆者の管見の限り、学習者が自動詞を選びたくて選んでいるか、それとも他動詞のつもりで選んでしまっただけなのかを問題にした研究はあまり行われていない。先行研究で述べたように「を自動詞」と「が他動詞」という学習者の回答は対象外となる場合が多く、それに関する考察があまり行われていない。そこで本研究ではフォローアップインタビューと学習者のコメントを使用し、学習者の意向を探り、その結果を評価に使用し、学習者の回答を以下の通り分析した。

学習者の回答を以下のように分けた。

① 他動詞のつもりで「を他動詞」を選んだもの
② 他動詞のつもりで「を自動詞」を選んだもの
③ 他動詞のつもりで「が他動詞」を選んだもの
④ 他動詞のつもりで「が自動詞」を選んだもの
⑤ 自動詞のつもりで「を他動詞」を選んだもの
⑥ 自動詞のつもりで「を自動詞」を選んだもの
⑦ 自動詞のつもりで「が他動詞」を選んだもの
⑧ 自動詞のつもりで「が自動詞」を選んだもの

例えば、正解が他動詞という問題の場合は以上の 8 種類の答えは以下のように評価する。

① 他動詞のつもりで「を他動詞」を選んだもの。（正解）
② 他動詞のつもりで「を自動詞」を選んだもの。（自他の混同）
③ 他動詞のつもりで「が他動詞」を選んだもの。（助詞の誤用）
④ 他動詞のつもりで「が自動詞」を選んだもの。（自他の混同+助詞の誤用）
⑤ 自動詞のつもりで「を他動詞」を選んだもの。（選択誤用+自他の混同+助詞の誤用）
⑥ 自動詞のつもりで「を自動詞」を選んだもの。（選択誤用+助詞の誤用）
⑦ 自動詞のつもりで「が他動詞」を選んだもの。（選択誤用+自他の混同）
⑧ 自動詞のつもりで「が自動詞」を選んだもの。（選択誤用）

逆に自動詞が正解という問題の場合は以上の逆になるわけである。例えば「古くなったみかんを食べて、おなか（を、が）（壊れた、壊した）」という問題において、考えられる回答とその分析は以下の通りになる。

① 他動詞のつもりで「お腹を壊した」→（正解）
② 他動詞のつもりで「お腹を壊れた」→（自他の混同）
③ 他動詞のつもりで「お腹が壊した」→（助詞の誤用）
④ 他動詞のつもりで「お腹が壊れた」→（自他の混同+助詞の誤用）
⑤ 自動詞のつもりで「お腹を壊した」→（選択誤用+自他の混同+助詞の誤用）
⑥ 自動詞のつもりで「お腹を壊れた」→（選択誤用+助詞の誤用）
⑦ 自動詞のつもりで「お腹が壊した」→（選択誤用+自他の混同）
⑧ 自動詞のつもりで「お腹が壊れた」→（選択誤用）

5. 結果と考察

ここで選択テストの結果を述べる。分析方法に従って学習者の回答は 8 種類に分類した。その結果を以下の表 1 にまとめる。

表 1　選択テストにおける学習者の平均正答率と平均誤答率

	正答	自他混同	助詞誤用	自他混同+助詞誤用	選択誤用+自他混同+助詞誤用	選択誤用+助詞誤用	選択誤用+自他混同	選択誤用
初級	50.5%	12.2%	3.7%	3.6%	3.5%	2.6%	7.7%	24.2%
中級	67.0%	7.7%	0.9%	1.3%	0.1%	1.4%	6.4%	19.3%
上級	75.7%	5.5%	0.3%	0.1%	0.0%	0.1%	1.8%	18.8%

表 1 は選択テスト全体における学習者の平均選択を表すものである。表 1 の通り、平均正答率は初級レベルでは 50.5%、中級では 67%、上級では 75.7%であり、レベルが上がるとともに、平均正答率が上がることが分かる。また、7 種類の誤答の平均誤答率はレベルが上がるとともに下がることが分かる。7 種類の誤答に見られた誤用は①混同に関するもの②助詞に関するも

の③選択に関するものの 3 つに分けることができる。本稿では紙幅の関係で①と②について論じる。

5.1　助詞の誤用について

江田ほか（2020）は自他の選択問題においては助詞がヒントになるため、助詞のある文の問題と助詞のない文の問題では助詞のある文の問題のほうがやさしいと指摘している。しかし、江田ほか（2020）では助詞が選択対象ではなかったため、助詞が選択のヒントになり、学習者の助詞の使用を調査することができないのではないかと考えられる。そのため本調査では助詞を選択対象とし、「が他動詞」「を自動詞」の選択は助詞に関する誤用なのか、自動詞・他動詞の形式に関する誤用なのかを調べるために、分析方法でも述べたように、例えば正解が自動詞で、学習者が自動詞のつもりで「を自動詞」を選択した場合は助詞の誤用と見なす。また、正解が他動詞の場合で、学習者が他動詞のつもりで「が他動詞」を選択した場合も助詞の誤用と見なした。以下の表 2 は、表 1 から助詞に関する誤答を取り出したものである。

表 2　助詞の誤用のパターンと平均誤用率（回数）

パターン／レベル	パターン 1	パターン 2	パターン 3	パターン 4		
	助詞誤用	選択誤用+助詞誤用	自他混同+助詞誤用	選択誤用+自他混同+助詞誤用	合計	助詞の平均誤用率 v
初級	(53) 29.8%	(31) 17.4%	(52) 29.2%	(42) 23.6%	(178) 100%	12.4%
中級	(8) 25%	(11) 34.4%	(12) 37.5%	(1) 3.1%	(32) 100%	3.4%
上級	(3) 60.0%	(1) 20.0%	(1) 20.0%	(0) 0.0%	(5) 100%	0.5%

調査結果の分析から、表 2 の通り助詞に関する誤用には 4 つのパターンがあることが分かった。また、助詞に関する誤用が多かったのは初級レベルの学習者である。初級における助詞の平均誤用率は 12.4%（178 回）であり、中級では 3.4%（32 回）、上級では 0.5%（5 回）である。

エルハディディ（2018）では学習者へのインタビューから、学習者の自動詞・他動詞の選択理由として文法知識が挙げられており、それには助詞「が、を」が主な理由になっていることが指摘されている。選択理由の一つであるという点から考えると初級の学習者における助詞の平均誤用率は高い（12.4%）と言える。学習者が主な選択理由である助詞を間違えるのはなぜだろう。

誤用には助詞だけを間違えるパターン 1 と、同じ問題で助詞に加えて混同や選択を間違えるパターン（2、3、4）がある。初級、中級では助詞だけを間違えるパターン 1 より、助詞に加えて混同や選択を間違える場合の方が多い。そのことから、助詞に関する知識不足は自他全体に関する知識不足を反映していると言え、助詞を間違える学習者は多くの場合助詞を間違

えるだけではなく同じ文において混同や選択（パターン 2、3、4）も間違えることが多い。エルハディディ（2018）では「が、を」の助詞が動詞選択理由の一つだったが、助詞を基準に自動詞・他動詞を選択する学習者は、ある程度助詞「が、を」と自動詞・他動詞の結びつきと使い分けができているが、本調査では助詞の誤用が多く見られる学習者がおり、それは自動詞・他動詞と助詞の結びつきと使い分けの段階にはまだ至っていないからだと言えるだろう。

ではなぜ学習者は助詞を間違えるのだろう。エジプトで広く使用されている教材『みんなの日本語』で学習者は初級の早い段階で助詞の「を」と「が」を学習し、その使い方がはっきり異なっているため学習者はある程度その違いが分かるようになると考えられる。しかし、同書の 29 課で自動詞・他動詞を学習し、初めて混乱が起きる。29 課では「が」は自動詞と一緒に用いられ、「を」は他動詞と一緒に用いられることを学習する。さらに「が」は自動詞と一緒に用いられ、「を」は他動詞と一緒に用いられるという新しい内容が十分に定着していないまま、30 課では「てある」を学習し、「おさらが並べてあります」のように他動詞と一緒に「が」が使用され、他動詞と一緒に使うのは「を」なのか「が」なのかが分からなくなり、使い分けが難しくなると考えられる。

また学習者は「を」は他動詞と一緒に用いられ、「が」は自動詞と一緒に用いられることを学習するが、「渡る、通る」のような「を」格と一緒に用いられる自動詞を学び、さらにそれが混乱の理由になると考えられる。

「が」は自動詞と一緒に用いられ、「を」は他動詞と一緒に用いられるという新しい内容が十分に定着してから「てある」を学習し、自動詞と一緒に使う「移動」の「を」格に注意させると助詞に関する誤用が減るのではないかと考えられる。

5.2　自他の混同

続いて、学習者の回答に自他の混同が見られた。本調査でいう混同は、学習者が自動詞のつもりで他動詞を選んだものとその逆のことである。表 3 は混同のパターンと平均混同率を示すものである。平均混同率は初級では 23.6%、中級では 14.4%、上級では 7.3%とレベルが上がるにつれ、混同の平均率が低くなる。

表 3　学習者の自他の混同のパターンと平均混同率

パターン／レベル	パターン 1	パターン 2	パターン 3	パターン 4		
	自他混同	選択誤用+自他混同	自他混同+助詞誤用	選択誤用+自他混同+助詞誤用	合計	平均混同率[vi]
初級	(248) 51.6%	(139) 28.9%	(52) 10.8%	(42) 8.7%	(481) 100%	23.6%
中級	(103) 53.6%	(76) 39.6%	(12) 6.3%	(1) 0.5%	(192) 100%	14.4%
上級	(84) 76.4%	(25) 22.7%	(1) 0.9%	(0) 0.0%	(110) 100%	7.3%

表 3 の通り、自他の混同に 4 つのパターンがあり、学習者の回答に混同だけが見られるパターン 1 と、混同に加えて選択や助詞の誤用が見られるパターン 2、3、4 がある。表 2 の通り、パターン 1 が最も多い。パターン 1 では、学習者がある問題において、自他のどちらかを選択するべきかを知っているにも関わらず、動詞を見たときどちらが自動詞でどちらが他動詞かが分からないため、自動詞のつもりで他動詞の形を選び、あるいはその逆のことをする。パターン 1 は、全てのレベルにおいて、全体の混同回数の半分以上を占めている。

パターン 2 は次に平均率が高いが、パターン 1 と異なり、動詞を見たとき、どちらが自動詞でどちらが他動詞かが分からないだけではなく、同じ問題において自他のどちらを選択するかも分からない場合である。

5.2.1　混同の特徴

学習者の混同には次のような特徴が見られた。

（1）同じ動詞の混同率が問題によって異なる

本調査では 10 ペアを対象にそれぞれのペアに 3 つの問題を設定した。各動詞問題における混同率を表 4 で示す。

表 4　各動詞における混同率

問題番号	動詞	初級	中級	上級	問題番号	動詞	初級	中級	上級
5A[vii]	切れる、切る	21.8%	16.7%	9.8%	8	集まる、集める	18.2%	13.9%	4.9%
5B		21.8%	11.1%	4.9%	18		20.0%	2.8%	2.4%
14		21.8%	5.6%	2.4%	28		25.5%	5.6%	4.9%
25		40.0%	5.6%	9.8%	9	閉まる、閉める	21.8%	16.7%	4.9%
2	決まる、決める	32.7%	16.7%	7.3%	19		12.7%	5.6%	2.4%
22		9.1%	8.3%	2.4%	29		21.8%	8.3%	4.9%
30		16.4%	13.9%	4.9%	7	並ぶ、並べる	38.2%	36.1%	41.5%
3	壊れる、壊す	27.3%	25.0%	7.3%	17		38.2%	30.6%	22.0%
12A		16.4%	16.7%	4.9%	27		30.9%	11.1%	9.8%
12B		16.4%	11.1%	4.9%	1	落ちる、落とす	50.9%	38.9%	12.2%
23		21.8%	5.6%	7.3%	11A		30.9%	38.9%	14.6%
6	始まる、始める	34.5%	5.6%	2.4%	11B		18.2%	8.3%	0.0%
16		21.8%	16.7%	4.9%	21A	落ちる、落とす	38.2%	44.4%	12.2%
26		18.2%	8.3%	4.9%	21B		36.4%	41.7%	14.6%
10A	折れる、折る	25.5%	5.6%	4.9%	4	見つかる、見つける	9.1%	5.6%	4.9%
10B	[viii]	14.5%	11.1%	2.4%	13		21.8%	11.1%	4.9%
15	折れる、折る	25.5%	11.1%	9.8%	24A		9.1%	0.0%	0.0%
20		29.1%	5.6%	7.3%	24B	見つかる、見つける	9.1%	5.6%	2.4%
					24C		9.1%	8.3%	2.4%

表 4 の通り、同じ動詞の混同率が問題によって高くなったり低くなったりする。例えば「切れる、切る」を例に挙げると、初級で問題 5 における混同率は 21.8%であるが、問題 25 における混同率は 40%である。つまり問題 5 では混同が見られなかったが、問題 25 で混同が見られた学習者が初級レベルの学習者の少なくとも 18.2%いる。どちらが自動詞でどちらが他動詞かが分からず、自信がないため、選択に迷ってしまい、同じペアであるにもかかわらず問題によって混同したり、しなかったりするのではないかと考えられる。そのため、同じ学習者が同じ動詞の 3 つの問題すべてを混同してしまう場合もあれば問題によって自他を混同したり、しなかったりする場合もある。

また、問題の構造や動詞の活用が混同率に関係していることも考えられる。例えば、「切れる、切る」において問題 14「サラダを作るから、トマトとレタスを切ってくれますか」がもっとも混同率が低かった。それは学習者が「て形」を学習したとき、その導入として「～切ってください」の文型を学び、練習を重ねたため、「切る」のこの使い方に慣れており、混同が見られなかったと考えられる。

（2）レベルごとに混同率が異なる

各動詞における混同率をレベルごとに比べるために、各動詞の問題における混同率の平均を計算し、以下の表 5 でまとめた。

表 5　各レベルにおける動詞の平均混同率

	切れる、切る	決まる、決める	壊れる、壊す	始まる、始める	折れる、折る	集まる、集める	閉まる、閉める	並ぶ、並べる	落ちる、落とす	見つかる、見つける
初級	26.4%	19.4%	20.5%	24.8%	26.7%	21.2%	18.8%	35.8%	39.1%	12.3%
中級	9.7%	13.0%	14.6%	10.2%	7.4%	7.4%	10.2%	25.9%	41.0%	7.6%
上級	6.7%	4.9%	6.1%	4.1%	7.3%	4.1%	4.1%	24.4%	13.4%	3.7%

表 5 の通り、初級と比べると上級における動詞の平均混同率が低い。エルハディディ（2018）では初級、中級、上級の学習者における自他の混同が様々なパターンを示した。本調査では 2 つのパターンが見られた。

① 混同率が初級で最も高く、上級で最も低いパターン

これには 10 ペアの動詞の内 9 ペアが当てはまる。このパターンでは初級で見られた混同率が、中級で見られたのより高く、また、中級で見られた混同率は上級で見られた混同率より高いという傾向を示した。それはレベルが上がるとともに学習者の自他に関する意識が高まり、自他を見たときに、どちらが自動詞でどちらが他動詞かが分かるようになるからである。初級の学習者が自他を別々に学び、別々の動詞として覚えるのに対し、中級、上級の学習者には自他をペアとして覚える特徴が見られ、学習者がペアの共通点を見つけて、自他の形を使い分けようとしていることがフォローアップインタビューから分かった。特に上級でペアとして覚える知識が強くなり、共通点（形態的対応(-aru,-eru)）があるペア「始まる、始める」

「閉まる、閉める」「決まる、決める」「集まる、集める」の混同率が 5%以下と非常に低い。

「切れる、切る」「折れる、折る」「並ぶ、並べる」の 3 つのペアの混同率は上級で以上の「まる、める」の動詞より高い。言語内エラーも考えられるが、この３つの動詞を「ます」形にすると、「切れます、切ります」「折れます、折ります」「並びます、並べます」のようになる。アラビア語では母音が 3 つしかなく、母音の「I」と「E」及び「O」と「U」の区別がない。また学習者は「ます」形を最初に学び、参考にしているため、そもそもその動詞の聞き取り、発音、使い分けは難しいと考えらえる。特に「並ぶ、並べる」は上級でも混同率が 24.4%と高い。それは母語の影響に加えて、「並ぶ、並べる」の問題 7「会議のためにテーブルといすを並べてください」では「を並んでください」を選択したことが要因である。筆者の経験から、学習者は授業で「並んでください」という自動詞の「テ形」を頻繁に耳にしており、他動詞の「て形」の「並べてください」よりも馴染みのある表現である。そのため、学習者が他動詞のつもりで自動詞の「並んでください」を選択したと考えられる。つまり、学習者はこの文脈で他動詞のほうが正しいと分かっているにも関わらず、「並ぶ、並べる」というペアは、「て形」になると、馴染みのある自動詞表現「並んでください」に引っ張られ、それを選択してしまうのである。

② 混同率が中級で最も高く、上級で最も低いパターン

このパターンでは上級における混同率が最も低いが、中級で見られた混同率が初級で見られたのより高い傾向を示した。これには「落ちる、落とす」が当てはまる。中級は学習者が自他を別々に覚える方法からペアとして覚える方法に切り替える過程であると考えられる。「落ちる、落とす」にはほかに似たペア（形態的対応(-iru,-osu)）があまりなく、ペアとして覚えるまでの切り替えが遅いと考えられる。そのため、中級では混同率が高くなり、上級では減るが、普通の上級における混同率も比較的高い。

中石（2020）は 15 の対のある自動詞・他動詞に関して「知っているか」「知らないか」学習者に回答を求めた。その結果、対のある自動詞・他動詞のペアの既知率に開きがあることが明らかになった。中石の研究および本研究の結果から学習者が対のある自動詞・他動詞を別々に学ぶことは意味の対応、形式的な対応への気づきを遅らせてしまうことが指摘できる。対のある自動詞・他動詞をある段階でペアとして教え、対の対応関係に気づかせることは重要であると考える。

6. まとめと今後の課題

本稿では学習者のコメントやインタビューから、学習者の選択における「を自動詞」「が他動詞」について論じた。学習者の「を自動詞」「が他動詞」は多くの場合、自動詞・他動詞の形式的な問題だとされており、研究の対象外となることも多い。本研究の結果から、自動詞・他動詞の形式的な問題に加えて、助詞に関する問題も考えられることが明らかになった。

中石（2020）は自動詞・他動詞指導に関する困難点を①形の問題、②意味用法の問題、③語彙的な問題の 3 つしか指摘していない。本稿では形の問題について論じ、本研究の結果から、その 3 つの問題に加えて、助詞に関する問題もあることを指摘した。今後はさらにアラビア語母語話者における意味用法の問題と語彙的な問題について研究したい。

【参考文献】

石川守（1991）「自動詞と他動詞の用法について―人の視点’と‘物の視点に関して―」『語学研究』64 拓殖大学語学研究所

エルハディディ・アブデルラフマーン（2017）「日本語とアラビア語における自動詞・他動詞の選択について―アラビア語を母語とする日本語学習者を中心に―」『日本語・日本文化研究』第 27 号　pp.194-203

エルハディディ・アブデルラフマーン（2018）「アラビア語母語話者における日本語の自動詞・他動詞の習得研究－学習者の中間言語と母語の影響について－」大阪大学大学院言語文化研究科日本語日本文化専攻 修士論文

エルハディディ・アブデルラフマーン（2019）「アラビア語を母語とする日本語学習者における自動詞・他動詞の選択について―アラビア語と日本語の書き言葉コーパスを用いて―」『間谷論集』第十三号　pp.175-194

江田すみれ・堀恵子編（2020）『自動詞と他動詞の教え方を考える』くろしお出版

杉村泰（2013a）「対照研究から見た日本語教育文法 ―自動詞・他動詞・受身の選択―」『日本語学』2013 年 6 月号・第 32 巻第 7 号（通巻 410 号），明治書院，pp.40-48

杉村泰（2013b）「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について―人為的事態の場合―」『日本語／日本語教育研究』［4］2013，日本語／日本語教育研究会・ココ出版，pp.21-38

杉村泰（2016a）「クメール語を母語とする日本語学習者における中国語の自動詞・他動詞・受身の選択について ―人為的事態の場合―」『名古屋大学言語文化論集』第 37 巻第 2 号，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，pp.49-62

杉村泰（2016b）「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について ―非人為的事態の場合―」『名古屋大学言語文化論集』第 38 巻第 1 号，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，pp.3-16

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I 』くろしお出版

中石ゆうこ（2020）「日本語の対のある自動詞，他動詞の習得段階とそれに適した指導方法」江田すみれ・堀恵子編（2020）『自動詞と他動詞の教え方を考える』くろしお出版 pp.1-23

守屋三千代（1994）「日本語の自動詞･他動詞の選択条件―習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』第 29 分冊，早稲田大学日本語研究教育センター，pp.151-165

Morita Makiko.（2004） The Acquisition of Japanese Intransitive and Transitive Paired Verbs by English Speaking Learners:Case studyat the Australian National University,『世界の日本語教育』14,pp.167-192

MuhamadMuhyidin 'Abd al-Hamid.（1980）Sharḥ Ibn ʻAqīl ʻalá Alfīyat IbnMālik, Dāral-TurāthCairo『Ibn Malik's AlfyaExplained by Ibn Aqil』

＜稿末資料＞

選択テストの問題の例

問題 1 「さいふ（を、が）（落として/落ちて）しまいました。今日はお金が全然ありません」

問題 2 自分の人生（を、が）自分で（決める、決まる）。

問題 3 古くなったみかんを食べて、おなか（を、が）（壊した、壊れた）。

問題 4 辞書でその言葉の意味を調べたけど、（見つけなかった、見つからなかった）。

問題 5 「このナイフはとてもよく（切る、切れる）から、気をつけないと指（を、が）（切れ、切っ）てしまうよ」。

問題 6 「9時ですから、授業（が、を）（始めて、始まって）いると思いますよ。」

問題 7 会議のためにテーブルといす（を、が）（並べて、並んで）ください。

問題 8 「昨日のパーティーは楽しかったよ。たくさん人（を、が）（集め、集まり）ました。」

問題 9 寒いので、窓（を、が）（閉めて、閉まって）ください。

問題 10 一か月前に転んで、足（を、が）（折り、折れ）ましたが、もうすっかり（治り、治し）ました。

---

[i] 「習得」の定義については議論のあるところであるが、自動詞・他動詞の産出能力を含む習得過程全体から、本稿では「助詞の選択」と「自他の形式的な区別」に焦点を当てた考察を行った。

[ii] 本稿ではエジプトの日本語教育機関（カイロ大学、アインシャムス大学、ミスル大学）で日本語を勉強している学習者に限定して調査を行った。

[iii] 「ねじれ」は杉村の用語であり、杉村の研究における「ねじれ」は学習者の回答における「を自動詞」及び「が他動詞」の回答のことである。本研究では学習者の意図を配慮し、「を自動詞」「が他動詞」の回答を分析方法における②③⑥⑦の通りに分析した。

[iv] 自動詞の中には、語頭に「A」（アラビア語で「ハムザ」と呼ばれる）を付けることで、他動詞化できるものがある。ただし、この方法により他動詞化する場合、元の自動詞における最初の母音は削除される（kharaja の場合、Akharaja でなく Akhraja となる）。

[v] 助詞の平均誤用率は助詞の全体の誤用回数を学習者の人数（初級の場合は 55、中級は 36、上級は 41 人）で割った後、テストにおける助詞の選択が求められた回数（26 回）で割って計算した。

[vi] 平均混同率は混同全体の回数を学習者の人数（初級の場合は 55、中級は 36、上級は 41 人）で割った後、テストにおける動詞の選択が求められた回数（37 回）で割って計算した。

[vii] 同じ問題に 2 回以上動詞の選択を求めた場合、最初は A、2 番目は B、3 番目は C としている

[viii] セルが空いているのは 10 ペア以外の動詞が選択対象の場合である。